

1. 教育の責任

担当する専門領域は、大きく分けて「心理領域」と「福祉領域」の2領域である。それらに加え、保育士資格、幼稚園教諭資格、ピアヘルパー認定資格の3つの資格取得に必要な科目を担当している。子どもの発達に関する心理学から保護者支援の相談業務まで心理領域は幅が広い。また、福祉領域は行政の実務経験を活かし、子どもの権利に関する内容から地域福祉までフィールドワークなどを取り入れながら授業を展開している。

【心理領域】

科目名	形態	単位数	開講時期	資格
教育・保育相談	講義	2	2年生前期	保育士（選択）、幼稚園教諭（必須）
子ども家庭支援の心理学	講義	2	2年生後期	保育士（必須）
発達心理学	講義	2	1年生後期	幼稚園教諭（必須）
子ども理解の理論と方法	演習	1	2年生前期	保育士（必須）、幼稚園教諭（必須）

【福祉領域】

科目名	形態	単位数	開講時期	資格
子ども家庭福祉論	講義	2	1年生前期	保育士（選択）、幼稚園教諭（必須）
社会的養護Ⅱ	演習	1	2年生前期	保育士（必須）
地域福祉論	講義	2	2年生後期	社会福祉士任用資格（選択）

【資格に関する領域】

科目名	形態	単位数	開講時期	資格
保育実習指導Ⅱ	講義	2	2年生通年	保育士（必修）
教育実習	事前事後指導含む	5	1・2年生通年	幼稚園教諭（必須）
ピアヘルパー演習	演習	1	1年生通年	ピアヘルパー認定資格（必須）

※担当する全ての科目は子ども生活専攻対象科目

2. 教育の理念

○保育の本質・目的を理解する。

保育者として子どもの最善の利益を擁護していくためには、第一に、現代の子ども家庭福祉の現状と課題について興味関心を抱くことから始まる。第二に、その課題に対する対応や解決策を見出すために、専門的な知識や技術を身に付けなければならない。現代社会において「児童虐待」「子どもの貧困」「ひとり親支援」は今では国民の抱える緊迫した課題でもある。社会問題がまさに保育の現場で日々繰り広げられている。そこで、多様化した保育ニーズに対応していくためにも、具体的かつ実践的な子ども家庭福祉の制度や実施体系を理解することが望まれる。さらには、「少子高齢化」「地域力の希薄化」など子どもたちを取り巻く環境の変化に伴う地域社会の問題にも視野を広げ、総合的な観点から「子ども」を捉えられるようにしている。

○保育の対象の理解を深める。

共働き、核家族化などといった子どもが育つうえでの家庭環境の変化に伴い、近年では育児不安や子育て支援に関する様々な課題がある。その保護者の養育力向上の一役を担える保育者に期待が高まっている。よって、保育の対象とは子ども、保護者、地域住民などと多岐にわたることが想定されるため、保育実践に関わる心理学の知識や発達の基本原理について体系的に理解していく。乳幼児期から高齢期に至るまでの心身の発達と、それを支える家庭、地域や社会という環境の在り方についても学びを深めていく。

○資格取得に必要な実践指導を行う。

保育実習指導にあたっては、保育士資格を取得するために3回の実習（保育所実習Ⅰ及び保育所実習Ⅱ、施設実習）に向けて、実習の目的などを理解した上で、記録の書き方や指導計画立案などの具体的な実習に向けての指導を重点的に行っている。教育実習は、幼稚園教諭二種免許状取得のための実習に向けた事前・事後指導に関する科目である。幼稚園実習では約4週間の学外実習を行うため、模擬保育などを取り入れながら実践力を養うような指導を行っている。いずれも、実習終了後は、実習報告会などを通して実習の振り返りを行い、課題を明確にすることで、保育現場で活躍できる人材育成を目標としている。

ピアヘルパー演習では、ピアヘルパー認定資格に向けての試験対策を含め、教育・福祉・保育などの対人関係職に必要な実践力を身に付けることを目標としている。人と関わるために必要なコミュニケーションスキルを構成的グループエンカウンターなどの体験を通しスキル向上を目指す。ピアサポートの「相手も自分も尊重し支え合う」理念を基に、カウンセリングや関連する心理学の理論や方法について学習していく。

3. 教育の方法

□講義科目においては、空間の広い教室を使用するため、PowerPointを活用している。講義科目においては一般的に教授側が一方向的に解説をするスタイルが多いが、受け身のスタイルにならないよう留意している。板書については、穴埋め方式になっているPowerPoint資料を配布し、授業で解説した上で書き込めるようにしている。黒板への板書も時には必要であるが、教授側が黒板に書く作業時間が多すぎると、待つ時間が長くなり、受講側の集中力を低下させてしまう。また、PowerPoint資料を活用し、自分なりにコメントを書き込んだり、友達の意見なども書き込めて復習の際に、何を学べたのか明確で振り返りやすい資料となるように工夫している。

□演習科目においては、各教科の目的や目標を明確化し、参加型のスタイルで行っている。表題に対してまずは自分自身で向き合い考える時間を設け、その後に他者の意見を聞いたり、グループディスカッションを行い、意見をまとめるなどの作業を取り入れるようにしている。また、保育者養成の専攻の学生たちが対象であるため、自らが「伝える側」となり、適切な言葉・表情・声色などを試行錯誤しながら表現していく機会を多く取り入れるようにしている。

□レポートについては、特に1年次の科目に関して多く取り入れるようにしている。目的は2つある。1つ目は、題に対して興味関心を持ち、主体的に調べたり、それに対して自分なりの考えをまとめる作業を繰り返すことで理解が深まるからである。2つ目は文章力の向上を目的としている。情報化社会の中で、正しい情報を見分ける作業もあるが、ただ調べるだけではなく、必ず自分の考えも述べるように指示している。自分なりの疑問や気づきを文章におこす作業は、実習日誌などを記載していく際にも大いに役立つ練習であると考えている。学びを深めていくための学習体験としてレポートの提出を指示しているが、その内容に対し、必ず添削をし、次の授業内でフィードバックするようにしている。書きっぱなしのレポートの意味は薄く、フィードバックすることで、自分とは違う角度で捉えた意見を聞いたり、疑問点が明確になると学習意欲も向上すると考えている。

□選択科目においては、フィールドワークを取り入れるようにしている。毎年同じ場所に学習に行くのではなく、受講生の意見を取り入れ、何を具体的に学びたくて選択しているのか耳を傾けるようにしている。授業目標や到達目標もあるが、受講生と一緒につくり上げていく授業を取り入れていくようにしている。フィールドワークを行うことにより、学内では気づかない学生の意外な一面もみられ、学生理解へもつながる機会と捉えている。

4. 教育の成果

1 年次の教科に関しては、基礎学習が多く、実践的な教科内容ではないため、受講生にとっては困難さを感じてしまう教授内容だと推察する。そのため、1 年次の授業終了時に受講してみても感想を書かしてもらっている。多く書かれていることは「子どもに関するニュースをよくみるようになった」や「子どもを救うためには法律や制度についての知識が必要ということが理解できた」などという自分自身の子どもを捉える視点が変化した意見が多く聞かれている。大きな教育目標でもある「子どもを取り巻く全てのことに興味関心を抱くことから始まる」ことは達成できたと言えるのかもしれない。しかし、実践の保育と知り得た知識を結びつけることが難しく、受講生の理解や満足度は時間をかけて成果として現れるのかもしれない。

2 年次の教科に関しては、演習しながら学んでいくスタイルもあるため、実習内容に直結するので学びやすいのかもしれない。実務経験を取り入れながら解説するようにしているが、保育の現場も日々変化しているので教授者自身、最新の情報に常にアンテナを張っていなければいけないと反省する点もある。

令和 4 年度より導入したピアヘルパーについては、今では子ども生活専攻の目玉となっている最新の科目だと感じている。入学の際の動機や関心事項の上位に「ピアヘルパー」という言葉がよく聞かれている。初年度の第 1 期ピアヘルパー認定資格取得率は 91.6%であった。これは、大きな教育成果であるといっているのではないかと感じている。実際に令和 5 年度までに子ども生活専攻の学生 25 名がピアヘルパー認定資格を取得している。ピアヘルパー演習という試験対策を含む講座を開講し、次のピアヘルパー育成誕生に向けて授業内容を何度も試行錯誤している。また、ピアヘルパーの活動領域を広げていくために、学校行事に係る裏方としての手伝いや、高校生に向けてのピアヘルパー活動、地域貢献を含めたボランティア活動などを展開していくように計画している。教育の一番の成果としては、社会のため、人のために行動できる人材を育成できているかという視点で捉えるべきではないかと考えている。

【ピアヘルパー活動の様子】

2022 子ども食堂
ボランティア活動



2024 地域ボランティア活動
「自遊楽校」にて



【ピアヘルパー演習授業風景】

2023
複数の絵をつなぎ合わせ
話を完成させる



2023 高校生へ向けての
ピアヘルパー演習



5. 教育の改善と今後の目標

特に子ども家庭福祉論や子ども家庭支援の心理学の講義科目は伝達すべき情報量が膨大であり、受講側に内容の理解と記憶の定着を求めたらいいか指標が定まらないところがあるので、改善が必要であると感じている。また、配慮の必要な受講生に対し、どこまで配慮できたのかも疑問に残るところがある。板書に困難さを抱える受講生に対しては、スマートフォンの使用を許可し考慮はしてきたが、ユニバーサルデザインの学習環境であったのかは課題が残っているように感じている。

このように、保育といっても、免許取得のために学ばなければならない領域が広く、受講側の負担が大きい。短期大学部という特徴もあり、時間割表を概観しただけでも学ばなければならない内容の量の多さに必然とするかもしれない。さらに、「児童虐待」「不適切保育」など子どもに関するマイナスな報道が多く社会で取り上げられる影響もあってか、保育者を目指す人材すら減少してきている状況がある。社会的背景も考慮しながら、保育者養成の教育方法について考え直さなければいけない時期がきているのかもしれない。しかし、命を預かる役目の国家資格である養成において、教育の根本的な改善は短期間では困難であるので、まずは現在の受講生の声に耳を傾け、改善できるところから取り組んでいきたいと考えている。